

アルカディア南東部の共同体と地域構造

福井 亜起

西洋史学専門 博士前期課程 2 年

はじめに

紀元前 4 世紀のギリシア世界はアテネ・スパルタの二項対立という勢力図が崩壊し、従来は脚光を浴びることのなかった周縁部に連邦国家の新勢力が胎動し始めた激動の時代である。アルカディア連邦は結成から数年後に分裂し、短命の政体に終わった印象が強いが、ヘレニズム時代に隆盛を迎える連邦国家の礎となった点で研究の意義は極めて大きい。報告者は連邦を構成した諸共同体に注目し、初期連邦国家の国制を再検討するとともに、ギリシア世界に存在した共同体の多様性を明示することを試みている。

I ペロポネソス半島とアルカディア

本プロジェクトは2008年11月6日～22日の2週間で、修士論文を執筆するに当たり必要な調査・研究を大学の支援を得て行ったものである。今回の調査ではマンティネイアを除き、アルカディア連邦の中でもとりわけ重要な位置を占めたテゲア、メガロポリスへと足を運んだ。現在のアルカディア地方へは、車で山間部を走りぬけ、アテネからおよそ2時間半でペロポネソス半島の「へそ」であり中継地に相当するトリポリに到着する。ペロポネソス半島は公共交通機関の発達遅れから、近年に至るまで観光地として旅行者に開かれることが困難であっただけでなく、とりわけアルカディア地方に関しては現在でも研究者ですら容易に踏み込むことのできない地域の一つとして名高い¹⁾。

メガロポリスは前368年、ヘリソン、アルフェイオス川の貫流する広大な平原と周囲の山岳地帯からなる総面積1500km²の土地に、一説では前371年レウクトラの戦い以降スパルタの勢力を封じ込める目的で既存の多数ある共同体を半ば強制的に集住させるという、アルカディア連邦の一大事業として建設された都市である²⁾。しかし実際に周辺領域を含め、メガロポリスの影響下にあった地域は400km²程度の範囲であり、面積上の比較をするならばテゲアよりやや大きくクレ

イトールより小さいと考えられている³⁾。前368年に建設され連邦が事実上崩壊する前362年まで、メガロポリスは連邦に10名のダミオルゴイを輩出し (IG V.2 1.1)、また都市域にはおよそ2万人を収容できるギリシア史上最大級の劇場及び評議会場に相当するテルシレイオンが併設しており、その重要性は明白である。メガロポリスは前363年連邦分裂の危機に際してテゲア、ボイオティア側に与し、マンティネイアと対立したことも知られている。史料上 (Staatsverträge 337: Polyb.4.33.9) 連邦分裂後、メガロポリスはアルカディア連邦の盟主となっていたことがうかがえる。

現在メガロポリスは、その立地からギリシア南部への電力供給地としていくつもの工場が林立する工業地帯となっている。その麓に広がる人口1000人足らずの小さな町から北へ数キロ地点に古代劇場とおそらくはアルカディア連邦の民会場としても機能したテルシレイオン、及び古代アゴラの遺構がひっそりと存在している。紀元後2世紀ローマ時代の著述家パウサニアスは当時既にメガロポリスの大半が廃墟と化していたと伝えるが⁴⁾、アゴラには現在でもゼウス神殿やマケドニア王フィリッポスの名に因んだ立派なストアの遺構等が確認できる (図1)。

そのメガロポリスからトリポリを経由して東へ、車で1時間程度の所にテゲアがある。テゲアはアルカディアの中でも特に強力なポリスとして名高くその歴史も古い。史料によれば前6世紀半ばスパルタの覇権を阻止する南部アルカディア最後の砦として登場し⁵⁾、また前5世紀前半のいつかの時点でマンティネイアを除く全アルカディアから構成される反スパルタ同盟の盟主であったこと⁶⁾、更に南部アルカディアに存在する在地の攻守同盟の盟主であったことが知られている⁷⁾。前394年のネメア戦争ではテゲアは2400名もの重装歩兵を提供し⁸⁾、その人口、戦力の強大さを示していると言えよう。前370年にはテゲアは激しい政治闘争を経た結果民主制を樹立し、マンティネイアと協力してアルカディア連邦を結成したと言われる⁹⁾。

ところが考古学的側面からの検討となると、公共建

築物や市壁の一部は確認できるものの、テゲアの都市プランはほとんど解明されていないというのが実態である¹⁰⁾。現在テゲアは別名アレアとも呼ばれている小さな町であり、近隣のいくつかの村落と合わせて一つの自治区を構成しているようであるが、ここに一際目を引く遺構が存在している。それがアテナ・アレア神殿である（図2）。

II アテナ・アレア神殿

アテナ・アレア神殿は1806年にDodwellにより初めて場所が確認されて以来、20世紀前半に在アテネ・フランス研究所を中心とする発掘が盛んに行われ、1924年にはDugasによりその集大成として神殿の最終調査報告書が提出されたが、その後もアメリカ、ドイツ、ギリシア、近年ではノルウェー、スウェーデン等の研究機関により発掘調査が断続的に行われてきている¹¹⁾。アテナ・アレアの聖域はその起源が伝説上のアレオス王に帰されている¹²⁾。起源の正確な年代を特定することは不可能であるが、神殿内部及び周囲の発掘調査からは、奉納品と考えられるミケーネ時代に遡る青銅製のピンや小像等の他、黒曜石の破片も発見され、その宗教活動が先史時代に遡る可能性すら提唱されている¹³⁾。

現在目にすることのできる神殿跡は、前古典期初頭（前7世紀）に建設された神殿が前395年に焼失した後、パロスのスコパスを棟梁に招いて造られたものだと言われている。スコパスは小アジアのハリカルナッソスに当時存在したヘカトムノス朝の君主マウソロスの霊廟を建設した人物としても名高いが、前395年のアテナ・アレア神殿焼失を上限とする場合、彼がいつ新しい神殿を手がけたのかが問題視されてきた。そこで年代特定のヒントとなるのが、テゲアで発見された奉納碑文である（IG V.2 89）。

この奉納碑文は1868年アテナ・アレア神殿の近郊で発見されたもので、現在は大英博物館に所蔵されている。奉納碑文とは言え、碑文自体は欠損して上端部のペディメント及びレリーフが残存しているのみである¹⁴⁾。それ故何のために、誰が奉納したのか等正確なことは不明であるが、重要なのはレリーフの図像そのものである。レリーフに描かれているのは、中央に双斧を携えたゼウス、その両側に立つ男女はイドリエウスとアダである。ゼウスはカリアの守護神であるゼウス・ストラティオス或いはラブランデウスであり、イドリエウス及びアダはマウソロスとアルテミシア亡き

後、前351-344年の間共同統治者としてカリアを治めた君主である。この奉納碑文は当該期のテゲア・カリア間の密接な関係を示唆するだけでなく、奉納者はおそらくカリア人と想定されることから、スコパスが小アジアで霊廟建設に携わった後に追従してきた者と思われ、その結果アテナ・アレアの既存の神殿建設の年代は少なくとも、スコパスが小アジアで活動し、その後テーバイでアルテミス・エウクレイア像を完成させたと言われる前335年の間であり、Norman は前345-335年の10年間を妥当としている¹⁵⁾。

III ポリス・テゲアとドーリアナ採石場

テゲアは既述の通り、考古学的に都市の景観を復元するのが困難と言われている。しかし近年盛んに行われているサーヴェイの結果と合わせ、史料上確認しうる兵力や遺跡の規模から推測される都市域の範囲、また近代の国勢調査から得られた数値との比較検討によって人口や国力、更に都市領域の特定を試みる研究がForsénによって提示されている¹⁶⁾。テゲアは残存する4カ所の市壁の断片から、都市域はアテナ・アレア神殿周辺を中心とするおよそ190haの範囲と推測されている。ただし後背地を含む領域に関しては少し問題があり、テゲアが存在する東部平原はマンティネイアと分かたれていたものの、その北部境界線が明確ではない。また南部境界線に関しては、テゲアの一部であった町がいつかの時点でラケダイモンのペリオイコイとなったことなど¹⁷⁾、国境線は流動的で画定しがたい。結果、後背地を含む都市領域の範囲は正確に把握できていないのが現状である。

ところがテゲアにはアテナ・アレア神殿以外にも前古典期に遡る神殿や聖域の跡がいくつも見つまっている。その一つがプシリ・コルフィの神殿（ca. 560-550）であり、良質な大理石の採掘場であったドーリアナ近郊に位置している。ドーリアナは現在アルカディア県の東部海岸沿い、アルゴリス県に近いところ（Kato Doliana）とテゲアから南東へ10km程度のところ（Ano Doliana）にある。前者は古代にはテュレアティスと呼ばれ、前545年頃アルゴスースパルタ間で激しい領域争いが展開された末、スパルタ領内、即ちラコニアに併合された地域であり、後者はスキリティスと呼ばれ、同じく前6世紀アルカディア戦争の末ラコニアに併合された地域である。問題の採石場が存在したのは後者のドーリアナに相当する。

神殿や聖域は、共同体構成員が結集して犠牲を捧

げ、競技祭を催すなどして共同体意識を高めることによりポリスの発展に寄与したデヴァイスであることは言うまでもない。アテナ・アレア神殿は都市域のこの種の神殿に相当する。しかし神殿・聖域は必ずしも都市域に存在しているわけではなく、山間部や他共同体との境界線上に建設されているケースも多く見られる。これは通常ポリスの領域的境界線を成すものとして辺境聖域と呼び習わされている¹⁸⁾。例えばテゲアに程近く、またパッランティオンに隣接するアセアに存在する5つの神殿はいずれも後背地に存在し、明らかに境界石の機能を果たしていた¹⁹⁾。テゲアのプシリ・コルフィの神殿は、建設年代は早期とは言い難いものの、前6世紀が領土獲得戦争の真只中であつたこと、また立地条件を考慮に入れるならばNielsenの主張する通り辺境聖域であつたということになろう²⁰⁾。

ところがプシリ・コルフィの神殿はその所在地から確かにドーリアナ採石場の領有権を主張するものではあつたが、その強固な主張の矛先は、例えば北部に位置するマンティネアや西部に隣接するマイナリア部族国家等の他のアルカディア諸国に向けられたものではなく、むしろ南部に存在する大国スパルタに向けられていたと考えられる。

IV 緩衝地帯としてのスキリティス

Forsénの提示する古典期テゲアの領域は、前6世紀にスパルタが領土拡張政策として行った戦争の末に奪われた南端のオイオン、カリュアイを除いて境界線が引かれ、ドーリアナ採石場に関しては東部方面、ラコニアとの国境線に極めて近いところに位置している(地図1)。そのドーリアナ産大理石で作られた奉納レリーフの断片が現在アテネ国立考古学博物館に所蔵されている。テゲアで発見され、Funerary banquetをモチーフとしたそのレリーフの制作年代は前520年頃に相当し、ほぼ同時期にラコニアで流行したいわゆる英雄レリーフとは題材が異なることも特徴的である(図3・4)。従って当該期にテゲアがドーリアナの採掘権を保有していたと考えて差し支えないであろう。

ドーリアナ採石場の操業年代は不確かであるが、フィガレイア領バッサイのアポロン神殿もドーリアナ産大理石を使用したことが分かっているため、少なくとも古典期までは確実に操業していたと考えられる。またドーリアナに確認される遺跡は古典期からローマ時代にかけて存在し、いつかの時点でドーリアナがラコニア領に入ったことがSEG vol. 15 Laconia no. 215の奉

納碑文の断片から窺える。そこで1983－88年にかけて行われたラコニア・サーヴェイの報告書を紐解くと、同遺跡は古典期には既にラコニア領域内にカウントされていたことが分かる²¹⁾(地図2)。

ラコニア・サーヴェイとForsénの提示するテゲア領域の境界線には差異が認められる。しかしドーリアナ採石場が存在したのは古代にはスキリティスと呼ばれる地域であり、スパルタ側としては領域北端部、アルカディア地方との緩衝地帯に相当したはずである。Shipleyはペリオイコイに関する研究の中で、ラケダイモン領域北端部に広がるアイギュティス、ベルミナティス、スキリティス、チュレアティスを、通常のポリスと同様に周辺領域を有し、一般的なペリオイコイとは異なる特殊な地位を保有した可能性のある地域として例外的に扱っている²²⁾。スキリティスに関してはポリスの核となる中心的都市の存在が認められていないが、スキリタイと呼称される集団がスパルタ軍の左翼を担う等、何らかの地位を得ていたのは確かなようである²³⁾。それ故この地域は古典期にはテゲア同様、或いはそれ以上にスパルタ寄りの政策を展開していたと言うことはできるが、テゲア或いはスパルタのどちらかの領域に確実に属していたという証拠はないと言わざるをえないだろう。

おわりに

スキリティスはラケダイモン北部境界線に展開する他の地域と異なり、核となる都市或いは町が特定されていないことは先に述べた通りである。これはスキリティスの特異性を象徴していると言えるが、核となる都市を保持せず複数の小規模な居住地が一つの地域共同体を構成しているという点において、アルカディアに存在した諸部族国家及び古代トリポリスに類似した政体と言うこともできる。奉納レリーフが示すように前6世紀第4四半期までドーリアナがテゲアの息のかかった地域であつたとし、仮にスキリティスが部族国家のような独自に機能した政体であつたとするなら、スパルタが前421年にパッラシア部族国家をマンティネアの圧政から解放した時のように、前古典期末のいつかの時点でスキリティスはテゲアから離れ、スパルタに依存する政策を敷いた可能性もあろう。

アルカディア連邦は前362年に事実上崩壊した。その原因は様々に推測されているが、一つは、例えばアテネやスパルタ、テーバイのような地域を統制しうる強力なポリスが欠如していたということである。メガ

ロポリス建設以前の東部アルカディア諸都市、特にテゲアとマンティネアの人口学的比較を行った Forsén の研究成果に基づけば、テゲアはおそらくマンティネアの2倍の人口を擁していたが、テゲアに警戒心を抱く部族国家の協力を得たマンティネアを征服するには力不足であったと言わねばならない。それはマンティネアが前420年代に一種の「帝国」を作り上げた時にも、部族国家がテゲア・スパルタに与するという逆のパターンで同様のことが言えよう。

こうした「同規模のポリスが並列するアルカディア」という構図が生まれたのは、前古典期にテゲアがスキリティスを失ったことに端を発するのかもしれない。しかしスキリティスがテゲアに従属的な部族国家であったのか、或いはテゲアの一部であったのかは不明であり、またラコニアのペリオイコイとして分類することができるか否かも現段階では判然としない。それ故多くの問題が未解決のまま残される形となったが、今回のギリシア調査を通じてアルカディア及びラコニアに存在する複数の共同体を検討し、なぜアルカディア連邦は短命に終わったかという疑問に対して一つの視座が得られたこと、また同時にラケダイモンの国家体制が従来考えられてきた以上に複雑であった可能性が高いという見解を得られたことを最大の成果として本稿を締めくくりたい。

注

- 1) Lloyd, J. A., F. S. A., E. J. Owens and J. Roy, (1985) 'The Megalopolis Survey in Arcadia: Problems of Strategy and Tactics' in Macready, Sarah and F. H. Thompson (eds.) *Archaeological Field Survey in Britain and Abroad*, The Society of Antiquaries. pp. 217–224.: 219. を参照。
- 2) Paus.8.27.1–8: Diod.15.72.4. 及び Megalopolis Survey p. 218. また Nielsen, T. H. (2004) ARKADIA in Hansen, M. H. and T. H. Nielsen (eds.) *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford University Press. pp. 505–539. を参照。
- 3) Nielsen (2004) ARKADIA, p. 521. を参照。
- 4) Paus.8.33.1.
- 5) Hdt.1.66.3.
- 6) Hdt.9.35.2. 前479–465年頃と考えられ、ディパイアの戦いでスパルタに敗北を喫した。
- 7) Thuc.4.134.1; IG V.2 282. また Nielsen, T. H. (2002) *Arkadia and its Poleis in the Archaic and Classical periods*, Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 366–367. を参照。
- 8) Xen.*Hell.*4.2.20.
- 9) テゲアのスタシスに関しては Xen.*Hell.*6.5.10を参照。また Larsen, J. A. O (1968) *Greek Federal States*, Clarendon Press, pp. 184–185. 及び Beck, H (1997) *Polis und Koinon*, Franz Steiner Verlag Stuttgart, pp. 74–75. を参照。Larsen, Beck とともにメガロポリス建設の目的はスパルタ抑止のみならず、マンティネア或いはテゲアの一方を連邦首都とすることによる他方の従属関係を回避するためであるという見解である。
- 10) Nielsen, T. H. (2004) ARKADIA, pp. 530–533. を参照。
- 11) Østby, E. (1994) 'Recent Excavation in the Sanctuary of Athena Alea at Tegea (1990–93)' in Sheedy, K. A. (ed.) *Archaeology in the Peloponnese New Excavations and Research*, Oxbow Books, pp. 39–63. 及び Norman, N. J. (1984) 'The Temple of Athena Alea at Tegea', *American Journal of Archaeology* 88, pp. 169–194. を参照。
- 12) Paus.8.45.4–5.
- 13) アテナ・アレア出土の文物はテゲア考古学博物館（冬季閉鎖）、トリポリ考古学博物館で見ることができる（撮影禁止）。Østby, *op. cit.*, p. 62を参照。アテナ・アレア神殿は幾何学文様期、前古典期、古典期の計3つ（或いは4つ）の建築物が連続して建設されたものである。先史時代に宗教活動が開始していたかは定かではないが、少なくとも前8世紀頃までには同場所が後にテゲアを構成する共同体にとって重要な場所になっていたことは間違いないだろう。
- 14) Waywell, G. B. (1993) 'The Ada, Zeus and Idrieus Relief from Tegea in the British Museum' in Palagia, Olga and William Coulson (eds.) *Sculpture from Arcadia and Laconia*, Oxbow Books, pp. 79–86. を参照。
- 15) Norman, *op. cit.*, p. 193. を参照。
- 16) Forsén, B. (2000) 'Population and Political Strength of Some Southeastern Arkadian Poleis' in Flensted-Jensen, P. (ed.) *Further Studies in the Ancient Greek Polis, Papers from the Copenhagen Polis Center* 5.
- 17) オイオン、カリュアイ（イアリュソス）等が挙げられる。
- 18) Hall, J. M. (2006) *A History of the Archaic Greek World ca. 1200–479BCE*. Blackwell Publishing, pp. 86–87. を参照。
- 19) Nielsen (2002) p. 182. を参照。
- 20) Ibid., p. 182. を参照。
- 21) Cavanagh, W., J. Crouwel, R. W. V. Catling and G. Shipley (eds.) (1996) *Continuity and Change in a Greek Rural Landscape: The Laconia Survey vol. II*, The British School at Athens, pp. 269–273. を参照。
- 22) Shipley, G. (1992) 'Perioikos: The Discovery of Classical Lakonia' in Sanders, J. M. (ed.) *ΦΙΛΟΛΟΓΩΝ Lakonian Studies in honour of Hector Catling*, British School at Athens, pp. 211–226.
- 23) Ibid., pp. 216–217. 及び古山正人（2006）「スパルタ北部国境地域の動向と国制上の地位」『國學院大學大学院紀要』37, 157–178頁：165–167を参照。

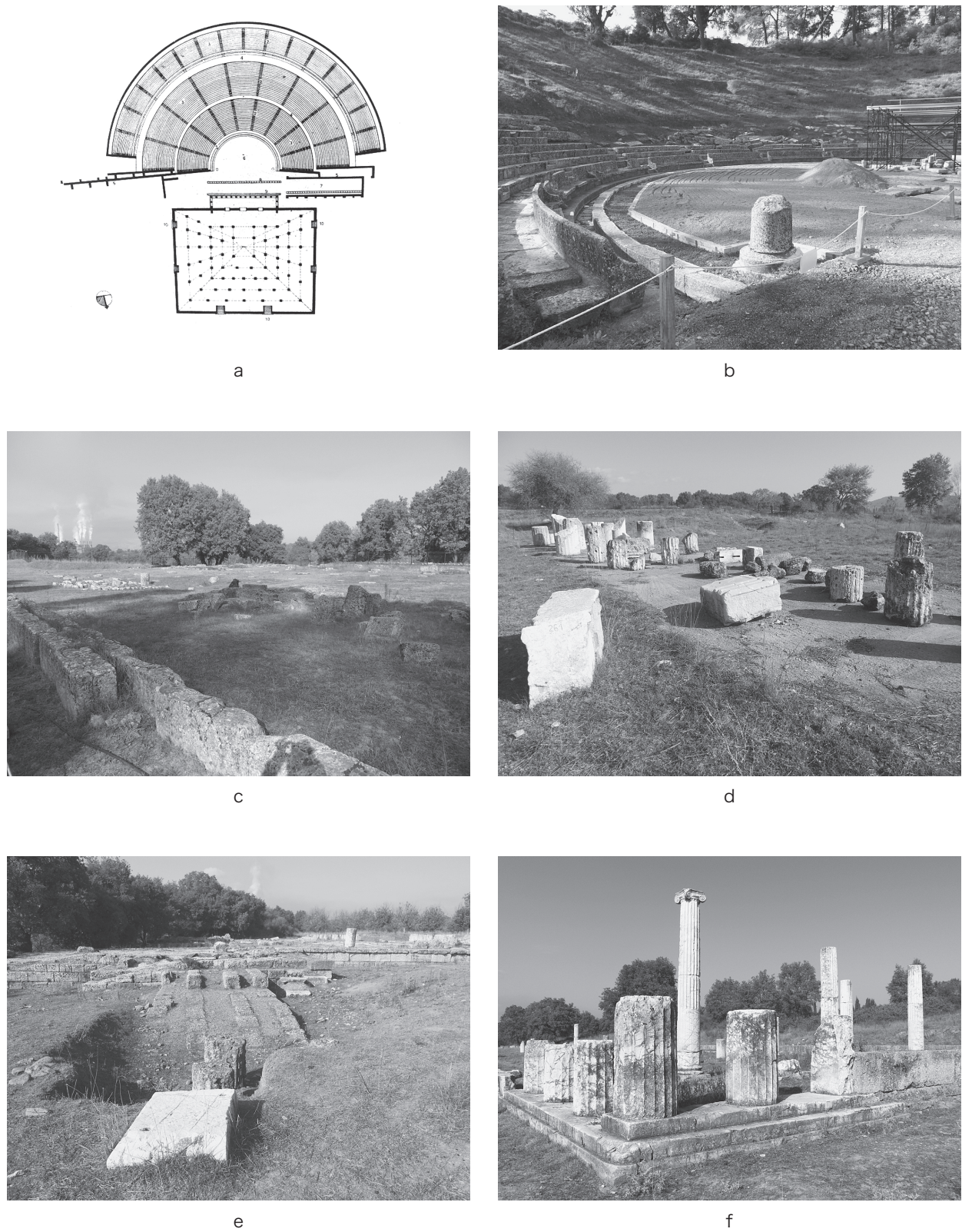


図1 メガロポリス 古代劇場・テルシレイオン (a-c), アゴラ (d-f)



a



b



c



d



e



f

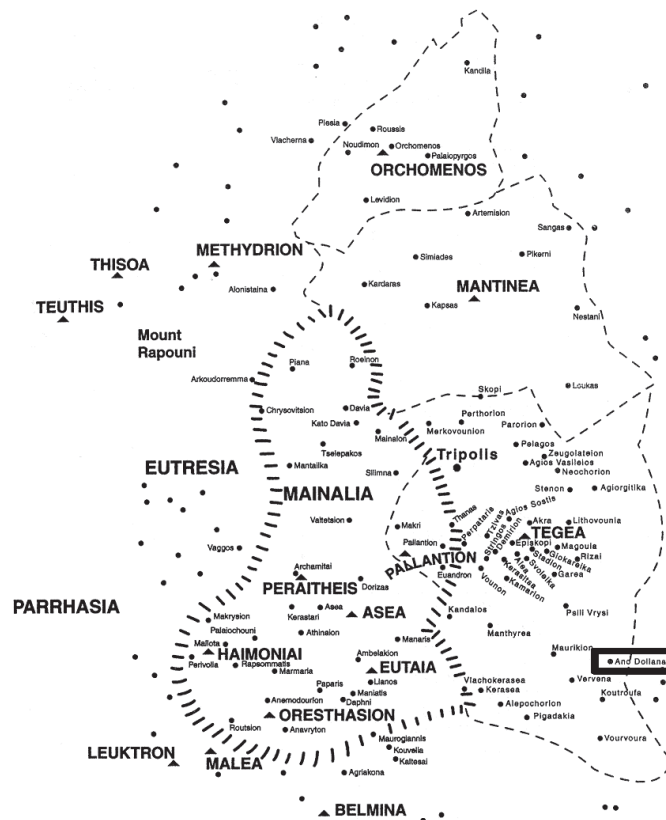
図2 テゲア アテナ・アレア神殿



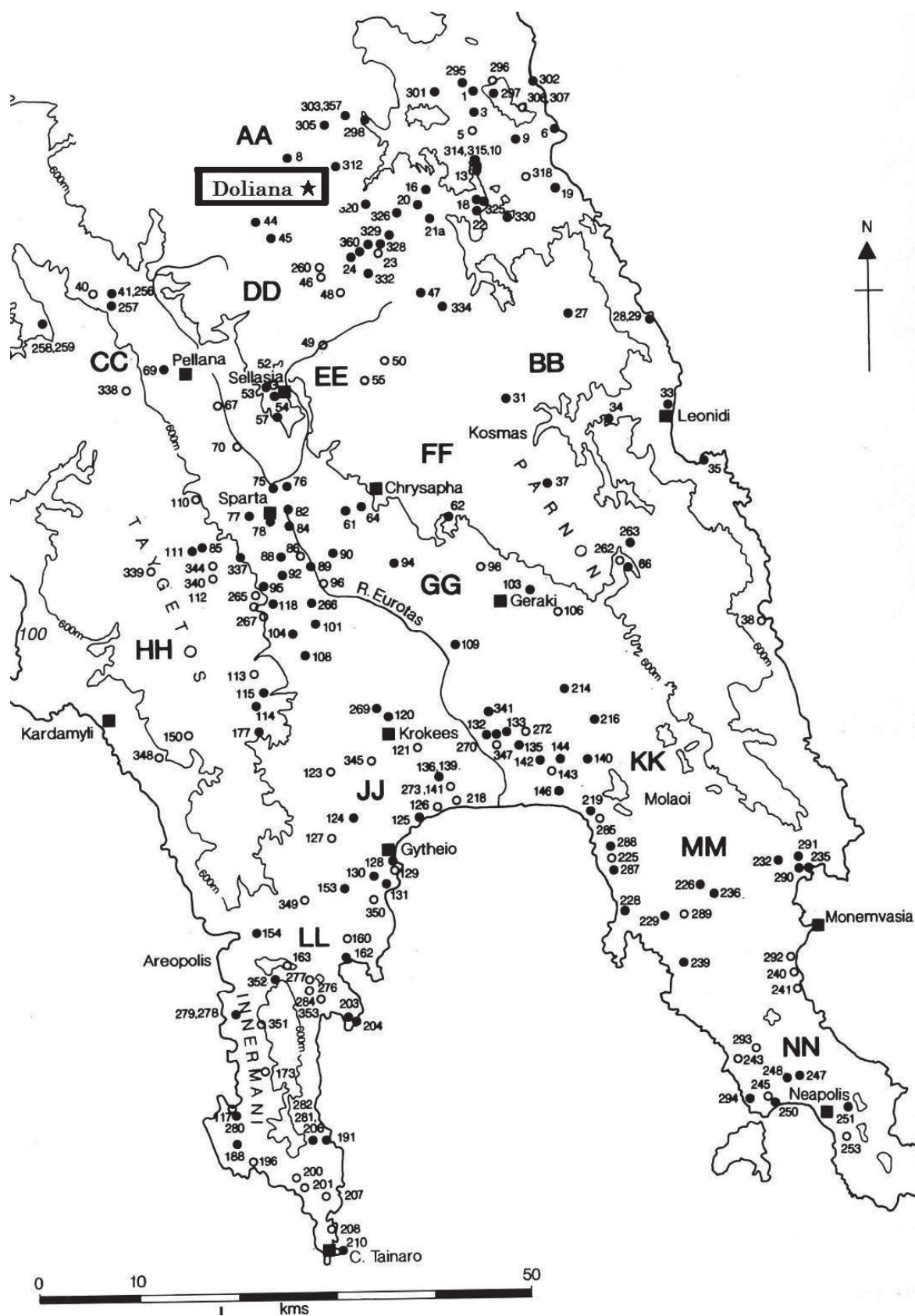
図3 Funerary Banquet relief
(National Museum no.55)



図4 Lakonian Hero relief
(Sparta Museum no.6517)



地図1 ドーリアナ採石場 (Forsén Fig.1)



地図2 古典期ドーリアナ採石場 (LS II III.23.5. を改編)